

教師が「子どもを見る」とは

—自身の振り返りを手がかりに—

池上 航 教職基盤形成コース

キーワード：教師の在り様，子どもを見る，振り返り

1. はじめに

私は、2014年にA小学校3-2で行った教育実習において次のような経験をした。子どもたちは1年生の時からアルパカを飼育していた。

アルパカとの時間の前、TAさんとNYさんが、「秘密の場所行こう」と言ってきた。アルパカ小屋から離れていく2人。「アルパカとの時間はアルパカ小屋に行くべきじゃないのかな」、「2人は自分勝手な行動をしているのかな」と思いながらついていく私。秘密の場所につくと2人は桑の実を採ってほしいと言った。この時に、アルパカのために来たのだとわかり私の子どもの見方にはっとした。 2014年6月24日(実習2日目)

アルパカとの時間はアルパカと過ごすという考え方に捉われていた私は、自分で考え動く2人に、自身の子どもの見方の狭さを感じた。2人の姿はこれまで「どうしたらアルパカさんと仲よくなれるのか」と試行錯誤を繰り返し、考え動く中で学ばれた結果である。だが、当時の私は、2人が何を学んできたのか分かつともしていなかった。

子どもの学びを明らかにするために、佐伯胖(2003)¹は、「ひとりひとりの子どもの頭の中にどのような問いかけが発せられるか、知識がどのように意味づけられ、どのような枠組みの中で解釈されていくのを明らかにしていかなければならない」と述べている。つまり「子ども理解力」²が必要なのである。子ども理解を石垣・窪島(2017)³は「内的条件として子どもの気持ちが生じているか理解すること」だとし、菅ら(2001)⁴は「子どもの行為を内面の表現としてみる」ことの必要性を述べていることから、子ども理解は、表面的な動きや言葉だけを見ていくものではないと言える。一方、竹内(2003)⁵が、「先生方は子どもの中にあるものが見えていない」と語るように、そのことは容易ではないように思う。

私自身、学校で子どもと過ごしても「楽しかった」としか語れない日々が続いていた。そのような日々の中で「もし子どもの姿に自分の思いを書けないなら、それは目には映っているが、何も見えていないかもしれない」というある先生の言葉から、「子どもを見ているつもりだが、見えない私」と向き合い、「子どもを見るとはどういうことか」と、自身の振り返りをもとに問い続けてきた。その振り返りには、私の子どもの見方がにじみ出ているように思う。

以上から本稿では、自身の振り返りにおける私の子どもの見方を手がかりに、教師が子どもを見ることについて言及することを目的とする。

2. 子どもを見ることができなくなる時

2.1 自身の材の捉えがない時

2016年11月22日、5月から定期的に行っていたB小学校2-1で国語の自己評価の場面を参観し、私は活動するMRさんの素敵な姿をとらえていたにも関わらず「○でも◎でもない」とつぶやくMRさんの困り感を解決するために「なら△にしときな」と言った。このことを振り返り、「素敵な姿があったとMRさんに伝えていたらどうだったかな」と立ち止まり、子どもにとって何が大切なのか見ようとしめない私が見えてきた。

さらに、2016年11月26日、9月から定期的に行っていたA小学校2-2で、国語『スーホの白い馬』の授業を参観した。子どもが、何故そう語ったのか考えられない私に気がついた。それは『スーホの白い馬』の概要を思い出すために読んでいただけで、私の読みがないからではないかと感じた。

以上から私は、子どもを見ているつもりだったが、子どもの本当に言いたいことや行動の意味が見えていないと気づき、そもそも子どもが見つめる材(子どもがかかわろうとする対象)の捉えがないままの私に問題があるのではないかと考えた。

2.2 自身の見方・考え方が固定化される時

私は、教材研究として、自身の読みをもって以下の実践を行った。

- ①国語『スーホの白い馬』(2017年2月～3月)B小学校2-1(担任OR先生と共に実践)
- ②国語『もうすぐ雨に』(2017年6月～7月)A小学校3-1(担任KS先生と共に実践)
- ③国語『ちいちゃんのかげおくり』(2017年10月～11月)B小学校3-1(私のみで実践)
- ④国語『うさぎのさいばん』(2017年11月～12月)A小3-1(担任KS先生と共に実践)

私は、『スーホの白馬』の振り返りで「私の考えたい場面以外を話す子どもを間違えだとして修正しようとしたが、その子どもの言っていることが間違いではなかったという経験から、『何故そう考えるのか』という意識が必要」だと述べているが、『ちいちゃんのかげおくり』において以下のような場面(2017年10月25日)があった。

ちいちゃんが空襲から逃げる中、母と兄とはぐれ、一人焼け落ちた家で過ごす場面で、「だれが『お母ちゃんとお兄ちゃんは、きっと帰って来るよ』と言ったのか」について考えていた時、「ちいちゃんの体の中に天使と悪魔がいるけど、悪魔は何も言っていない」というMYさんの言葉にIMさんは「どうして？」と尋ねた。私は2人のやりとりに戸惑い、『おばさんが言った』と考えている人はどう思う？」と尋ね、その流れを止めた。授業は、IMさんの疑問に答えることはないまま授業は進んでいった。

「きっと帰って来るよ」と言ったのがちいちゃんかおばさんかの対立で授業を構想していた私にとって、MYさんの発言は予想外だった。それ故、私と子どものずれを大きくしないため流れを止めようとした。即ち、私は子どもの語りが私の意図しないものだった時、私の意図する読みに戻そうとしていたのである。私は、4つの実践を行うも、材を深めようとすればするほど、どう私の材の捉えと子どもの材の捉えを重ねるかにとらわれ、「子どもが何故そう考えているのか」を見ることができなかつたのである。

3. 子どもを見ていた時

3.1 子どもの見方が更新された時(A小3-1, うさぎとの暮らしでのSKさんの事例)

うさぎのちょこが誰も気が付かないうちに出産していた。今後のことを数人で話している時、SKさんが私に、「なんで私が毎日うさぎ小屋にくるか分かる？」と尋ね、私は、「うさぎが大好きだから？」ときいた。すると、SKさんは、「それもあるけど、毎日うさぎを見ないと小さな変化に気が付けないでしょ」と言った。SKさんは、「うさぎを飼いつづけるか」の話し合いの時、「みんなで飼う」と言っていた。私はその「みんな」を「クラスみんなで仲良く飼いたい」と考えていた。だが、「毎日うさぎを見ないと小さな変化に気が付かないでしょ」というSKさんの言葉に「毎日うさぎを見ないと小さな変化に気が付かない、けど私だけではその小さな変化には気が付ききれないから、みんなで見ていきたい」といううさぎへの想いを感じ、うさぎ小屋に来る人が少なくとも毎日うさぎ小屋に来続けるSKさんの姿が「うさぎが大好き」な姿から、「どこまでもうさぎのことを考え動く」姿へと見方が変わった。 2017年6月21日 振り返り

私は、翌日から登校時間を早め、SKさんらと共にうさぎ小屋で過ごすようになった。それは、「毎日見ないと小さな変化には気づかない」というSKさんのうさぎへの思いを知り、SKさんを「うさぎが大好きで頑張り屋」と見ていた自身の見方の浅さ、新しい視点を与えてくれた嬉しさを感じると共に、「SKさんの言う小さな変化とは何なのだろう」と思い、動かずにはいられなかったのである。

3.2 材の見方考え方が更新された時(A小3-1, 総合学習『村づくり』のOTくんの事例)

私は村づくりを始めた5月ころ、子どもの頼みに応えようとしていた。しかし、私自身が子どもと共に建物を建てることを楽しく思え、「面白いことしたいな」と考えていた7月、私は村の建物と建物を結ぶ橋を架けた。その橋を架けてから、他の建物を結ぶ橋をつくることに没頭していった子どもたちの姿があった。また、以下の出来事があった。

朝、子どもたちと村にいと、OTくんがきた。基地作りの続きをしに来たが、一緒にやるはずのMRくんが来なかったため、OTくんは『公民館』(村の建物)の2階で過ごしていた。朝の時間の音楽が流れ、帰ろうとOTくんが立ち上がった時「オレ、村でお祭りやりたい」と言った。私はその一言にワクワクし、「素敵だね」と言った。

OTくんの「お祭りやりたい」という言葉に、私は「村をつかって面白いことをしたい」というOTくんの村への思いを感じた。それまで、「建物を建てる中で村を面白くしたい」と思っていた私にとって「村をつかって面白いことをしたい」というOTくんの発想は斬新だった。そして、「村を使う」という目で村を見た時、村での祭りが魅力的なものに思え、ワクワクしたのである。 2017年7月19日

私は、ただOTくんの言葉を肯定したわけではない。私にはなかったOTくんの発想に触れ、村が「建物を建てながら楽しむ場」と共に「その建物を使って楽しめる場」という新たな可能性を感じたのである。それは、子どもが村で様々なことを感じていたように私も村で様々なことを感じており、私自身が村という場を「子どもと共につくって行こう」

と捉えていたからである。即ち、私は、村づくりの場に、子どもに何か教えるものではなく、「子どもが見つめる材を共に考える一人」としていたと言えるだろう。それ故、OT さんの言葉を村の新たな可能性として捉えることができたのだ。

うさぎとかかわる私、村づくりをしていた私は、その場に、「教えるもの」ではなく、「子どもが見つめる材を共に考える一人」としてそこにいた。その様な時、材とかかわる中で子どもに対する見方考え方が更新され、子どもの言動の背景を知りたいと願い、更に自身の材の見方考え方が更新されたのである。

4. 今考える「子どもを見る」

こうして自身の実践とその時の在り様を振り返る中で、以下の3点が明らかになった。

- ① 子どもを観察し記録することが子どもを見ることではないとしながらも、子どもが見つめる材に対する自身の思いや捉えがない中では、子どもを表面的にしか見ることができない私
- ② 教材研究で材に対する自身の捉えを深めてから授業に望む時、子どもの語りに理解できなくなると、自身の捉えにすぎり、子どもを見ようとしなくなる私
- ③ 「うさぎ」や「村」など、子どもが見つめる材を「教えるもの」としてではなく、その「材を子どもと共に見つめる一人」としてその場にいる時、子どもの願いや思いを見ようとしながらそこにいる私

私の中にある「観察をすれば子どもを見ることができる」という見方、考え方を疑い、教材研究で材の捉えを深めようとした私は、いつしか「どうすれば子どもの考えを私の捉えと重ねられるか」という見方考え方に縛られ、子どもを見えなくさせていった。つまり、私自身の材の価値や捉えが固定化される時、子どもを見ることができなくなっていることが明らかになってきたのである。一方で「教えるもの」としてではなく、「子どもが見つめる材を共に見つめる一人」でいる時、私はその材の魅力を柔軟に捉えようとし、子どもの「やりたいこと」「大事にしたいこと」を多様に思い描いていたのである。その時、私は「子どもが見えていた」時であると考えた。

以上から、教師が「子どもを見る」とは、子どもの姿に教師自らの価値観を問い、更新していくことであり、それは、自らの実践を振り返り続けることだと捉えた。

文献

- ¹ 佐伯胖『「学び」を問い続けて-授業改革の原点-』（小学館、2003）116 頁
- ² 文部科学省「新しい時代の義務教育を創造する」（中央教育審議会、2005）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212703.htm
- ³ 石垣・窪島「担任ができる実践研究の可能性についての予備的考察」（『滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』25, 2017）79-86 頁
- ⁴ 菅・山本・三谷・中野「小児看護実習における対象理解に関する指導方法の研究」（『神戸市看護大学短期大学部紀要』20, 2001）65-73 頁
- ⁵ 竹内敏晴『からだ＝魂のドラマ -生きる力がめざめるために-』（藤原書店、2003）43 頁